

---

# 当たり前の行動（嘘

十歌龍太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

当たり前の行動（嘘）

### 【ZPDF】

2012年

### 【作者名】

十歌龍太

### 【あらすじ】

僕のただの初恋話。間違っている要素は一つもない。あるとすれば、それは僕と彼女以外のすべてだ。

(前書き)

こんな友達が一人はいてもいいと思う、今日この頃。

僕が好きだった女の子の話をしよう。

彼女はごく一般的な女の子だった。女の子のテンプレートのような、もしくは彼女が女の子というものの原型になつたのかも知れない…とバカなことを考えてしまつくらいに一般的だった。

名前は前見祐まえみゆうといい、きれいどころでも言いやすい。

本を読んでいることもあるけれど、基本的に友達と楽しく笑いながら話していることが多い。

彼女の周りは、いつでも人がいた。

一つ、彼女がほかの同年代の女の子と違つたのは、彼女が一般的過ぎたことだ。

「女の子」という枠からふれずにすれずに、女の子の役割を、演じているような錯覚を受けるほどに。

彼女と僕の通学路はほとんど同じだったので、たまたま見かけることはあった。けれど僕は奥手で、クラスが一緒の彼女と話したこともなかつたために並んで帰るなんていざ知らず、後ろのほうで歩きながら視界に入る彼女で満足していた。

彼女のやることなすこと全てがまるで運命によつて元から決まつていたかのように自然で、自然過ぎて、その不思議によつて僕は彼女に惹かれていた。

そんなゲームのロードのような彼女が、ある日トラックにひかれ死んだ。

その瞬間を、僕は近くで見ていた。

通学路をいつものように歩いていた僕は、彼女が前方に歩いているのを発見し、いつものように静かに視界の隅に彼女を入れていた。彼女は短い道路を赤信号で渡ろうとして、死角になつている道を右折してきたトラックに轢かれたのだ。車の騒音、肉が潰れたような骨が砕けたような音、人々の話し声や生活音。それらが自然と耳

に入つてくる。

彼女の死の音は、あまりに自然に耳に入つてきた。

こうして死んでしまうことが、さも当たり前の様な感覚に陥つた。けれど僕はその考えを振り切る。そして彼女の死について考える。

彼女が轢かれそうな時、彼女はこちらを見ていた。あの頃の僕は彼女の口の動きから、何を話しているのかを理解できるほどにまで至つていた。痛いだけかもしれないけど。

しつていたよ

彼女は僕の目を見て言つていた。

表情は、見ていない。

そしてまた考える。

ナニカガ、オカシインジャナイカ。

ナニカワカラナイナニカガ、クルツテイルンジャナイカ。

ナニガオカシイノダロウ。

考えが燻り、心が濁つて、イライラが募り、無力感に押しつぶされる。

僕は、何をやつているのだろう。

彼女の葬式の日になつた。クラスメイトは僕以外誰も来なかつた。親族も、母親だけだつた。その母親も早々に携帯片手にタクシーでどこかへ行つてしまつた。僕は一輪の紫色のサイネリアを買つてきて、彼女の棺桶の中に入れた。

雨の中一人、とても寂しい淋しいお葬式だつた。

その日の晩に電話がかかってきた。僕と仲の良いクラスメイトだ。皆僕を心配しているという。僕を心配しているという。

怖かった。  
次の日から僕は学校に行かなくなつた。クラスメイトに会うのが

誰も前見祐の存在を覚えていないかもそれないと考えてしまつてから、学校は僕の敵になつた。

なぜ彼女はこんな目に逢わなければならないんだ。友達にも親戚にもぞんざいに扱われて、ほとんど誰にも知られることもなく、生きていたのか死んでいたのかも意識されない。

彼女は生きていたのだろうか。ある本では人々の記憶から消えた時に人は死んでしまうのだそうだ。その理論では彼女はもう死んで——いや、僕が残っている。僕は覚えている。僕は知っている。彼女は決して死はない。僕が覚えているのだから

彼女を救いたい。彼女を元に戻したい。死にかけの彼女を救う方法を、考へることにした。そして

カンガエルコトヲ、ボクハヤメタ。ムネ一、キキヨウヲダキナガ

ラ。

事故から二週間後、僕はクラスメイト全員を持ち込んだ包丁で殺した。殺したことに対する感想は何もない。僕の計画に必要だから殺した。それだけ。

教師に取り押さえられる。そんなことなどお構いなしに僕は叫ぶ。

一前見祐を思い出せ！！」  
続ける。

そして渾身の力を喉に籠めて叫ぶ。

そして僕は、警察署へと連れて行かれた。

僕は何か悪いことをしたのだろうか。この世界が、クラスメイトが、悪なのであつて僕は正しいことをした。それは搖るがないはずだ。

世界は、世間は、きっと前見祐を思い出しただろう。ということは前見祐は生きている。良かった。めでたしめでたし。

……あ、そうだ。前見祐の母親を殺すのを忘れてた。ここから出たら、真っ先に殺しに行かないとね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7201n/>

---

当たり前の行動（嘘

2010年10月10日05時55分発行